

試験粉碎を以って大学の幻想を払拭せよ

本日の試験は如何なる意味を持つのか

農学部に於いては本日より前期試験が行われようとしている。この大学側のスケジュールに対し、13日(土)には120番教室に於いてP.M. 1:00より全体討論集会が行なわれた、ここに於いて今回の闘争の内容について、更に試験が行なわれることがもつ極めて重大な問題が討論された。この討論の過程で明確に15日からの試験を粉碎するという視点が語られた。即ち、今回の試験が、授業再開を媒介としたなしくずし的日常化による闘争圧殺の仕上げとしてあり、同時に試験→進級、卒業の問題を学生の前に登場させ、闘う学生の間に動搖を生ぜしめるという政治的恫喝であるという規定である。次に試験制度そのもののもつ問題である、果して学生が大学に於いて獲得したものがあのふうな試験で計り得るのだろうか、そして、その価値判断の基準はどこにあるのだろうか、この

ことこそ「試験」そのものへの鋭い問題提起であろう。

既に8日から始まつた工学部の試験は試験粉碎闘争によって「当分の間中止」となつた、まさに「儀式」としての試験の本質が暴露されたのである。即ち労働力商品化規定された(本人の意志がどうであろうと客観的には)学生の資本主義的価値の決定を為すものとしての試験である。以上の点をふまえ我々は断固本日行なわれようとしている試験を粉碎しなければならない。

最後に我々は農学部教授会、並びに教授個々人に対し彈劾の言葉を發せざるを得ない、何故ならば口では学生と話し合わなければならないと思っていりと言ひながら、教授会は13日の討論集会への我々の呼びかけを拒否し、又当日一人の教授も主体的に参加し我々と討論しようとしたかったのである。

農学部闘争委員会